マルチリンガルCALL授業の取り組み

村上正行
京都外国語大学マルチメディア教育研究センター

1. はじめに

大学を取り巻く環境が大きく変化してきており、大学の個性が問われるようになってきたと考えられる。このような中、京都外国語大学では、英語以外の初習外国語教育の充実をはかるとともに、外国語大学の特色を活かして「マルチランゲージラーニング」の取り組みを行っている。この取り組みでは、従来の日本の高等教育機関における語学教育で行われてきたような、外国語として一カ国語を選択し習得するという方式から脱却し、少なくとも二カ国語を同時に学習し、両言語における同レベルの言語運用力の獲得を目標としている。

この取り組みにおける新しい挑戦の1つとして「マルチリンガルCALL授業」を計画し、平成15年秋から実践を行っている。本稿では、この実践の現状及び調査結果を報告する。

2. マルチリンガル CALL 授業

マルチリンガル CALL 授業の最大の特徴は“様々なメディアを用いてティームティーチングによる授業を行う”ことにある。ティームティーチングの試みは、初等中等教育では数多くなされているが、高等教育において異なる専門分野を持った教員2名が同時に授業を行うといった試みはあまり見られない。本実践では、二言語の専門教員が同一の言語現象を、それぞれの個別言語の観点からその表現形式を示し、その共通点と相違点を比較言語学的観点から分析し明確にすることで、両言語の発音、文法、語彙、意味、文化など多様な面に対する学習者の深い理解を促すことを目指す。専門知識を持った2名の教員のやり取りによって授業内容は深みを増すことが期待され、教員同士も刺激を受けながら授業を行うことが可能となる。

また、本実践ではマルチメディア教育研究センターが中心となってコンテンツ作成を体系的に行うことを目指している[1]。従来、コンテンツ作成は教員の役割とされており、教員に非常に大きな負担がかかっていた。近年、ようやくコンテンツ作成のための人材が必要であると言われるようになってきたが、デザイナーなどの専門家の不足などが問題となっている。コンテンツ作成の理論となるインストラクショナル・デザインに基づいて、教員・デザイナーなどによって構成されたチームによる教材作成を行う。CALL教材作成を通して、コンテンツ作成に必要なマネジメント、人材育成の手法などを明らかにすることを目指すとともに作成したCALL教材の評価も実施する。

3. 実践

平成 15 年度秋学期から「CALL EF」の授業を開講している。開講時間は金曜 5 限・6 限の 2 コマ連続授業であり、対象は英語を専攻する学生でフランス語を第二外国語として履修している学生とフランス語を専攻する学生で英語を第二外国語として履修している学

生で、現在 43 名の学生が受講している。映画のセリフなどを題材として、英語とフランス語の比較文法論的アプローチにより、音韻的、形態論的、統語的、意味的、語用論的、そして文化的測面から多角的に両言語のより深い理解を目指し、LMS(Learning Management System)や独自の CALL 教材などを用いて演習も行いながら、授業を展開している。

2 回目の授業の際に、アンケート調査を実施し、40 名の回答を得た。質問内容は、受講理由、コンピュータ利用、授業への期待に関するものなどであった。受講理由については質問紙に 7 項目を提示し、複数回答してもらった。結果を表 1 に示す。この結果から、この授業に対する高い動機づけ、興味を持っていることが見て取れる。特に、2 ヶ国語の比較という内容に興味を持っていることが分かる。また、「コンピュータ利用全般に対する意識」に関する結果を表 2 に示す。やや苦手、苦手とする学生が大半であることが分かる。

「この授業に期待すること」という内容について自由記述で回答してもらった。*"英語とフランス語の文法などを比較することで、新しい発見が何かできればうれしい"*や *"英仏の文化などの違いを手始めに比較文化、言語学への興味を深めること"* といった意見が多く、受講理由同様 2 ヶ国語比較に関する期待感は高い。また、*"語学力アップはもちろんなのですが、パソコンに対する苦手意識が少しでも減らせれば、、、と思っています"* といった意見も見られ、興味のある語学学習を通してパソコンのスキルを身につける、という目標を持って受講している学生もいることが分かる。

4. 今後の展開

平成 15 年度に開講された授業は英語・フランス語の 1 つであったが、平成 16 年度はさらに英語・スペイン語、英語・ドイツ語の授業が開講される予定である。今回の実践に対する調査結果を元にして更なる改善を進めていくことが今後の目標となる。

参考文献

[1]村上正行・梶川裕司(2003)「京都外国語大学における CALL への取り組みと支援体制の整備」平成 15 年度私立大学情報教育協会大学情報化全国大会予稿集 pp82-83

図 1 「CALL EF」の受講動機

項目	人数
「CALL」という新しい授業形態に興味があった	21
「英語とフランス語の比較言語学」という内容に興味があった	36
「2 人の先生が一緒に授業を行う」という授業方法に興味があった	19
今後役に立つ・残るものがあるだろうと思った	23
この時間帯があいていた	0
単位が欲しかった	3
この授業はおもしろそうだと友だちに誘われた	2

図 2 PC 利用に対する意識

	人数
得意である	0
比較的得意である	6
少し苦手である	23
苦手である	11